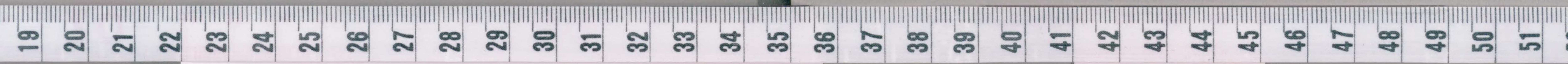


唐太日記

上

特1
2457



国立国会図書館 タイトル『唐太日記 2巻』 請求記号 特1-2457

ガラス使用

茶溪鈴木先生著
多氣志樓主人註

唐太日記

全二冊



橋本玉蘭翁畫文苑閣藏板

唐太日記例言

此日記主人之見聞手記物もあつた唯余の五百里外の
孤島を経歴し幸甚誠書する情状を有するに
見録し其の事ありしを記す
よすをてしと珠録もあつた貴くも
漢之自叙し又る記見録し家藏
のしは余の事ありしを記す



夷地文字のし生地を記す
付録の考撰を記す



特 1
2457

甲斐のあまのこも又宮に上りて記さるる事人の記述と陸奥の
ことと申してさうりぬのこも少故に後述悔情の時よとて
遠近の思ひを述べしむるものなり他は行はざる也
とある申す所の事なる島七志は等しい西宮下において

近江守重光の事

はまの事後漢を主申すの事善美のこりよとて薩路
連島子千役せらましくニユニユタニといふ運上屋をたすこ
シユヤ越と云ふ山程開闢と申す人の事といふ事
る事なる山中で踏破して東浦なるナイブツといふ

出来より突トツリの間と探りマーヌイといふ事なる西浦
越よりとシラヌといふ事なるソウヤノ後海城へ歸らば後海
の事と待たる事十余日の事記中よりと生要致松澤とて
置れと彼地は此方の海所置ありと舟とてありと
はまの事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
余は後述よりと見る候と以て後述の指し加へ新開の事
穴伸と慰めしむる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
伊勢の事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
あ政四丁この篇の中はと流しお綴の偽全とてとて

松浦竹四郎源弘

唐太日記 列言 〇三



甲寅 唐太日記卷の上

多氣志郎 松浦弘 評注

嘉永甲寅六月余堀使君ヨ後ハ蝦夷地の西浦を巡視シテソウ

ヤ 蝦夷地西海岸ヨカラ 小風待モ

同十三日順風シテ同所ヲ出帆一唐太島ある志良努之ニ向テ



注志良努之ハ唐太島の南第一岬西ノトロの崎のサハ西

岬あり後ろハ山有是ヲ靠テ一小湾ヲ取ルソウヤと去ル

ト十八里トシテ極高凡四十六度余也シラヌシトシラウシの



誤言也シラ、と岩の^トあり^クウ^シと^クマ^シと云と此地前より一ツ
 の礁あるの故に辨るる會所一棟其外蔵、夷家七軒甲寅
 の頃迄ハ山靱人等爰に來りて交易をなせり^{ナリ}
 風西に轉^リたれ^ニ區春許潭^{クニシム}へ向て颯々^ク此夜ハ洋中にて夜
 を明し翌^日十三日未明より朝嵐は帆を^シ遣^ルふ其湾中鯨魚潮を
 噴上げて其眺めい^ハらん^クらん^ク辰時前同所^ニ着^リり
 注區春許潭ハ當島第一の好港西人爰を指してアニソ港と
 云運上屋えりて建物蔵^キ中^ニ弁天社等美^ク敷^キ立^テり其
 北八丁^ノバゴドマリ南三十余丁^ノポロアンド^ノリ等

何處も番屋蔵^キあり大船何程^ノても前^ニ滯^テ碇^キは^シ不^宜し
 此所ハ癸丑の秋魯夷東住せり地あり地名クニ^ニユ^ニと浪^ハ無^ク
 静^カあると云コタン^ノ所と云儀あり實^ニ好港^ニ依^テて^居り
 此の^所あり

村垣使君其餘僚属も亦皆同日ふ上^リ岬^ニたり是より先^ニ渡^リ
 越^スる人^ト一同會合して唐太東西巡視の事を謀^リ兼^テハ堀
 使君東浦村垣使君ハ西浦巡視の心組ありし^ニ糧米人^ト爰^ニと
 差支への事の出来て東西手分あり難^クれ^ト西使君とも
 ふ西浦より巡視ありしとあり余ハ國思^ハても從^ヒひ^マつ^ク
 といふ^ト兼^テ而^シ思^ヒひ^マつ^クともかく差支もある^トあり水野氏^ト
 正太^ト也^ト

唐太日記 卷之二





うきやれ
 五年の船あり
 けり
 おうの船あり
 山はあそび
 前果



三ノ氣志樓主人 圖

共ニシレトコ岬の方巡視の事を命せられし

注シレトコサキ々當島東南の第一岬クシユンコタンを去て
三十余里極高四十六度余峻巖峨々として絶壁の地あり
是は激せる潮勢白浪を溯り難所と唱ふ地名シレトコをシ
ライトコの結語ありシラ々前も云岩としてイトコを尽る
こと云儀あり岩の果と云

余亦あかく思ひしれ先能く土人ニ尋詢ひし區春許潭より
東浦へ出る間道はシユンユヤ越と云り春秋の頃夷人の通路
として夏の際ハ草木生繁り数十里の間人煙絶する難所あり
あれども東浦へ出る捷徑あれを格別僕従を喊しあは聊の又

夫して通路ありきよなり

注クシユンコタンより以北五里計してシユンユヤと云る所有
其川とちよ入る少の陸を越日程六日あり東海岬ナイ
ブツよ出る是をシユンユヤ越と云あり然るふクシユンコタンと
出て東奥に到る也當時本道と称る南の方叶々シヤニと
云るに到り是より上ある沼に越此沼より陸路に少を
過て又沼あり東浦トシナイチヤへ出夫よりヲチヨボカリ
ウエンコタンリーコヌシヘツリーヲブツサキ^半シユマヲコタン^五イヌ、
シナイ^余ヲソエコン^六ロレイ^ニシユシユウシナイ^六シユマヤ^半
ナエブツと廻るあり其里程一倍に及ぶよめて夷人等歩行



の時ハ此レユシユヤ越の方と通るあり

余ヒシカ竊ハ喜ハ此道ユシを踰テ国界ユシハ至んことを堀使君ヒシカハ請ヒ申せし
ハ使君ヒシカその意をよみし人夫ヒシカの煩ワザレハあつたふ處置ヒシカもあつたは
如何ヒシカありて其山越ヒシカとて命ヒシカせられし然ヒシカレ此日ヒシカ矢口ヒシカ
直養ヒシカも余ヒシカも如ヒシカく此間道ヒシカを踰テ国界ヒシカハ到らんことを村垣使君ヒシカ
建白ヒシカしたり其志晴ヒシカ合ヒシカしつゝも亦奇ヒシカと云へし此日ヒシカハ兩人同行
して山越ヒシカありしものよきを松前ヒシカの家来ヒシカハ談し支配人ヒシカ清水平
三郎ヒシカハも談し兎角ヒシカして人夫ヒシカ糧食ヒシカの手當ヒシカと出来ヒシカられ此行ヒシカの
志ヒシカハ遂ヒシカハ決ヒシカしぬ

十九日今朝ハ朝陰ヒシカり昼ヒシカの頃ヒシカより空晴ヒシカ風吹出ヒシカせり朝四ヒシカ時過

り頃ヒシカハ區春許潭ヒシカと費ヒシカせり

余ヒシカ後ヒシカ一人ヒシカ直養ヒシカも同一ヒシカ一人ヒシカ熊打ヒシカ足輕ヒシカ水牧ヒシカ惣太ヒシカ番人ヒシカ寫

松豊吉ヒシカ郷道者ヒシカ區春許潭ヒシカの乙名ヒシカイツポングヒシカタゴエヒシカの小使ヒシカサーブヒシカ一
アイノ等ヒシカあり人足ヒシカハエ子ヒシカアンベツヒシカエシマヒシカワセヒシカタボヒシカシラボヒシカクヨヒシカヲケ
ン、モンキヒシカワムツナヒシカケトチヒシカン、エルヒシカシユトイヒシカ、カンヒシカユ、女夷ヒシカハエ
ケラサケヒシカンピリケヒシカス、ケタヒシカフヤ、ヤエヒシカランマヒシカ、シラエヒシカト、ヲコヒシカランヌヒシカ、シユ
コシユイヒシカケ、上下ヒシカ貳ヒシカ十四ヒシカ人ヒシカあり此内ヒシカ糧米ヒシカの減ヒシカじりヒシカふ随ヒシカ中ヒシカより
追ヒシカり歸ヒシカきり

三拾余町ヒシカより雲羅ヒシカ此所ヒシカより送りヒシカの又ヒシカこと被ヒシカをヒシカかてヒシカり此ヒシカハ
ハ番屋ヒシカあり又ヒシカ去年ヒシカより在留ヒシカの魯西亞ヒシカ人の畑ヒシカの試ヒシカ作ヒシカりヒシカせり所



あり三畝歩程も有之蘿蔔^{ダイコン}吧^ゴ芋^{イモ}あり作りてあり傍は番小屋の跡あり瓦を製したる跡^カ摸^カ型^タ等取散しあり

注ウシラとつゝる地形後ろの方^ト槃^ト立山とつゝ其下は番屋一棟あり其邊り地味肥沃ある故に魯人も畑地を築し又其地の土をりて瓦等を焼し跡有なり

夫よりウコカリウシ此所以前ハ夷家有より今ハあしウシエナイ稻荷の社夷家三軒あり五町余ありエントモヲ口同式軒あり五丁ありトマリランナイ同四軒あり八丁余ありチナイボ此所は清水平三郎の持小屋あり是より明朝の潮を待てシユシユヤ川へ乗入る船とて来り日と晩をされとも一泊したり

注此チナイボの地とつゝる西向とつゝ向濱ルウタカと對しとつゝ一灣をれしとつゝ奥シユシユヤ川口より其治内越而海淺し所とつゝ寄洲ありて干潟あり船を容りつゝ依り此辺りより満潮を待つ容多あり

此所より平三郎持小屋ありとつゝ寝食も安かりき此処の前より五斗の畑有て^{ダイコン}芦肥^{チサ}苜蓿^{ニンジン}紅蘿蔔^{ゴボウ}等を作りて芦肥を越年番入り一の食料として水腫を病むる奇薬のよし此後より炭焼の小屋あり是等皆平三郎始て仕りたり後僕等前濱りて鯿の四五寸斗あるを取来りて食し鯿夷語と力バレイと云此夜ハ心よくお臥せり





シユシユヤ越山道の圖
多氣志郎 製

是より上未だ分明ならずれどもあるにた

北



此辺シユシユヤホリと云ふ高山あり

此辺ハシホリと云ふ山あり

此辺タコイホリと云ふ山あり

此辺平山根木立原あり

此辺根木立原あり



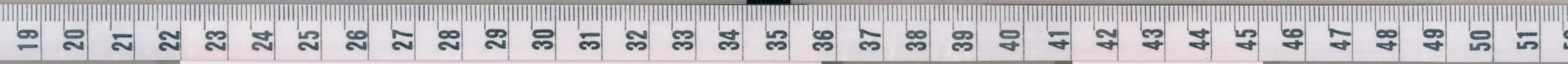
注當所より奥にユシユヤ辺に産する鱒の味美ありと又其よく
産する他は穀をし冬日より此湾中一面に氷結り也山の
辺りの土人其氷上より大筒火を燃し穴を穿其火温の氣を集
り集る魚を括搶して突取る羽の八龍湖にて氷を割て網を
投し渙するより其魚一倍せりとのや又其肉味も龍湖より比
より多しを美らりとのなり

廿日朝曇りたきとも雨の氣色とも見え及今朝潮の満り
りて昨夜より夷船と前漢より来たは未明より支度して乗
船せり然るに此行ハ峻惡の山路を越るとされ尋常の服装
にてハ此と通行成難きよしあるは夷人の衣服アツシと云物を

著し尾花帽子と云ものを打被りキナホスとのなる脚半を踏り
固く一絶を得たり

欲執孤筇窮峻奇風餐雨卧亦何辭樹皮短褐芭花帽也好
人呼為島夷

注此間道ハ道形も亦き越を元の目的と山沘水取等より取て
丈よりとも高き草の中を分り谷地中をると行とあり故
に終日下柙の露深され也此装て行とあり其アツシと
いふ木皮ツキウの木にて織たるものなり是よりツキウの雷紋
柄のものを木綿りて縫綴と土人の常服尾花帽子オノウシとのなり
芭花の穂をて作りしりのあるより羽の最上辺より出又



キナホスとのくろの奥羽にて蒲脚半とて寒地ハ木綿にてハ
雪の中凍合してあゆむ急く又草深き所を越る少ハ一月も不
保々故よ多く此蒲にて作りてを用也是ハ南部領の沼宮内
辺より出其上品なるハ馬の尾とてつく作り雪中越る山中ハ
ハ甚よ活しきものなり

凡半里程乗出たる頃より空の氣色俄よかわり雨降り出たり
ツライホ地名よりハ三丁余とてシユシユヤ地名夷家八軒あり三拾一
余とてシユシユヤ川にあり入口水深き丈五六尺余川口午の三
中よあり

注シユシユヤハ其地形後ろの方ハ鳳尾松の黒く粗なる

山續きシユシユヤノホリとのくろく靠て前ハ少一の岬をり其
辺り蒲柳原より水際ハ蘆荻多し其年ハ家居を尚所と
此湾の第一奥の東岬より波浪少しと有りシユシユヤ柳の
夷言その多なるもの号せしや也是より土人等歩行の節
ハ川口の手前字メナシサとのくろくを海を歩行するより
夫より山に入て字チタエとあるよりあり船にて行ふハ一里も
沖を乗りて此川をちへ棹さへ入る此川ハ湾中第一の奥の
方より洪水の節押出せし土砂多く処々ハ附例と有りて船
動を乗りとて難渋する所あり

川は流りて四五丁程の左の方椴林の内ハ鷺の雛の梢より落



たつて驚て飛廻るを見附り番人豊吉船より飛下り續いて
夷人共走り廻り終り捕りたり是を西使君へ獻じしとて
水野氏へ書と添て歸り船の便なきたり此辺鴨の子雀の如
くありのお群る水上を行き渡り川より半道行
きて枝川へ入るより船を棄て上陸せり此所字チタ地名と云由
木挽小屋あり雨より強く降出しこれ此雪の小屋泊せ
と鐵と去りても無て山越の日を積りて食糧と携へこれ
何程の峻急ありとも雨は障へらましく滞留ありてい志を
遂へるもあつと鬼を角もして前路をすまんと決定して
歩を進めぬ

和人と白米夷人と玄米とて九十日程の食糧を負載しとの
余の船とてトンナイチヤよりナエブツの方へ回と積りて船
一の今も引續いて出たりたつとるれも風潮は障へられ
みち東浦と回る内終り此船来りたり
注此船廻りの事の前よりいひる如くチベシヤニより沼越トン
ナイチヤへ引出し東海岬をナエフツへ搔送り行事あり
此辺り兩岬とも檜檜夷松の木の林あり女羅數丈の長さとの
廻りて地は垂るる内内地は絶て見えて唐画の山水の如く
まじ一絶と賦して其木の皮を削りて置

松掛女羅千尺長素絲翠蓋滿山香平生愛翫唯圖畫始識



人間有此疆

此道樹枝交加して眼を遮り頭を障へ枯木朽根路を塞ぎ脚を
 着るを多く雨は降くと降り困苦いふをわかれ幸うして二里
 ほどすすみ少く小高き所より弁当をきしつり爰をメ、
 地と云小流ありて水清冷蚊の多きこと言語は絶り火を焚
 少く疎まあるあり夫より壺里半程して字アライ地名と云
 此所少く小高深林の中へ小屋掛したり小屋掛と云く氷の
 窟し氷所を掘り又小高き湿地ありと見立るありあ惡
 者ぬハ腹痛の患あり湿地に卧るとハ瘴氣を打てて病を得且
 虫の疾多して難養するあり扱小屋掛と云く氷を凍り立

本へ枯木の丸をわきし是して屋根紐と云く其上を櫃の本
 の皮して葺きあり夷人とも事馴たはハ携へる鐵してその皮を
 剥きして辛早きことの水あり

注此山道中誰しても通初の時小屋を架ともや必と櫃の立
 木の皮と上下長四尺斗に鉄目を入置て剥き是して葺く
 三四人の宿とくま小屋家根と云く其皮凡或十枚二十枚
 を用也その皮を葺く木の皮より必と一枚ありて剥きはと
 剥き取し木の枯朽るとのちり像てその木は小屋掛したる云所の
 跡を余通行の時節見るふえ一ヶ所毎に百本余ありと云
 たり是等のありとも此地樹木の多きことを知るべし



小屋の角より枯木を集めて終夜火を焚き急率に掛る小屋
たれと雨降出する漏りて堪なくも何とてお上り油紙あり
引掛て虎角して夜をぬぬ

廿一日昨夜より雨降り続きたり申の時以てアライ地名とて半
丁程にてアライ川より此川水清冷なりとて嗽さぬ夫より
山道前日の如き扱地裏松の中と九寺里程にてコイ地名と云地
より深草の中より小屋掛あり是より入て朝飯の扱り飯を食す

注此地一ツの沼あり又沼周り九寺里半是より落るをコイへッ
と云水清冷なりと云り出入多通行の節多し此所にて宿
をとり余り通行の時も此宿より小屋ありと云れども爰より

来ることを得たりと云つコイと云るにて露宿しぬと云にヤ
を云く是より雪路ありは早著と云れども夏道ハ中々
著し難し

番人富松樹皮を剥て此所と始り通らせしを記し其を病ふ
めり余乃其本に漫書したり

草露鞭来山露新手排芽塞分荆榛風流官吏過斯地開闢
以來唯二人

此辺より左右草生茂り虎杖イヌハコに似て夷言ハソソと云まて款冬
夷言をコロクニと云ふ一圍余ありこの路を塞ぎ先ハ見ると
能く其の上泥濘りて深き所ハ膝を没し寺里半より小川を



渡り深林を分行くは向より来るものあり東浦ヲタサンといふ
 所よりウクシユンコタン勤番の松前家士一同僚よりきす書状の
 飛脚あり此夷人の話より先立の間宮等へ積贈る米船をヲタサン
 洋より傾覆し其米を失ひし故より来る飛脚ありと此米も
 我々糧に關係するものあり各是よりして心を傷めしり爰より
 飛脚は別遣書食して歩を前あたると路は猶も悪くさぬとの
 草簍を以て水葵の如くして葉の大ききものありて擯舌と云
 款冬いよ多くていよ大なる

款冬如竹鬱叢生葉々相重翠影清山路不妨多雨露一莖
 代傘蔽頭行



唐太日記 卷之十一



注世間歎冬の大なるものと秋田歎冬と号て好事の人其業を
擲ふ大き藤紙は半一又風強家多し是を筆に此は此地の物
は是は倍して若藤紙は擲ふ時全紙は満へく是ともの
比せ馬業合羽とも云ふなり

晝休せし所より武里余とてライ地名と云る茂林は小憩を此辺立
木の中程を尻して扱きたるやうなる跡あり倍て是を土人は
向うに羅熊の雪中途は迷ひるる事あり又是より武里余
行てハセ地名と云所は夷人とも通称の爲は掛置たる小屋を
止宿と

注此所ハハセと誌されし實ハ此処ハアセクシといふ地

ありハセと此所より行て先生嗽をきし川をハンケナイと
いふ其川の向ありし越而此辺の土人往來とも此所の
川の此方より彼方より北宿よりありしありしと云ふも此川の
向より宿よりあり

此小屋ハ左右は雨覆あり中より火を焚あり今宵直養余は
云糧食給せし志を遂ぐる次日を併せて進んといふれども
女子の人妻も接りたまは意を任せて某處に進んで糧
食の手當をさし行季ハ跡より搬運せしを余は托せ
とわたり乃其意を任せて余ハ一日路も後進してはとんと嫌なり
許余未だ直養を邂逅せし歟といふ此所は讀みりて其意氣を



感し拍手して一笑と此深藪中数日の難程猛獣の跡歴と
 志く恐むき地多う小直養強て前ととる其意敢て糧食
 の為のこゝろあゝと入し此辺り足は泥濘又没し面部は如何
 やうな装とも忙懐の為責むるも同行の為は即ち取ら
 て路をとりぬるも何時に如何ともなり難し余もクニエニコタシ
 武人と同行のよう隊長より言聞されうき為入の遅足と察し
 前行を於一日あよ只土人のこゝを百連て出立したるも按て遠
 りと又あまの遅足と種々の奇話もありし他他日土人
 共より聞ゆりしもおのし

此夜ハ夷人共の掛る小屋をれハ床とさとのもちく坂強し

多くして帳の破りより入瘴氣肌を侵して眠るはききり
 多し

廿二日朝の雨は曇り昼迄より晴より直養ハ朝疾く起き後僕
 共又番人富松共は嚮道者イツホンク其外人夫五人を引連糧
 米其外必用のものも持せり余より先は費せり余ハ少く後通
 てあつり山道廿町余も過てハセハツ水清く浅く後く此
 川より嗽せり

注先生此川ハセハ有よよのりてハセハツと志すされり
 此山中ハハセハツと云ふものおし出入此川と指しるべし
 ケナイと云ふありベンケら上と云ふとナイと期決之

此所ハ上の沢と云儀余ハ此川の上にて宿しぬ
又拾四五丁とて同一川の上の岨サアブニアイノ余を脊負
て渡せり夫より一里斗りて字イナヲカルと云る処より
出ル此所木幣多くて山靈をまつり

注此所亦名千ハホイナヲカルウシと云ある一柳の大木其
其傍に往來の土人削花^{エナヲ}と建て拜する一行と云り其謂ハ
昔此島に鍋の無かりし以タコイニ住る姥く土を以て始て
鍋を作り東浦の土人ハ生製を教へ夫よりして南濱より西
浦の土人も教へんと鍋と脊負此所まで越えりて風を過
て破りたりとまより意の違せざるを患ひて此処にて病し

帰り終り死せりと云り其跡を今神に奉り置き此辺りの土
人往來の時として削花^{エナヲ}をまつて数日の途中の食糧を獲さ
し越えんとを祈り誓ふとのや也此其土鍋と此島にて用ひ
しは昔の昔の赤本話一の物と思ひ居りし今度^{丁未}
産堀君は過浦の初よりニユンナイとて古の圖せしめを
書を授出中よりほり出せりとて同所の土人獻ぎし中にて
持歸りありし書を侍り余も始て出端と用ひし昔傳り
を信しぬ

又壹重余よりニユニユヤの川出る此処とヲロコトイと云
此辺りぬりの道ハみもなれとも草生まらぬ深く歎きしめ

唐太日記 卷之卅 三十一



徑リ七寸余

深サ三寸五六分

手作リ厚サ

九三四分ヨリ

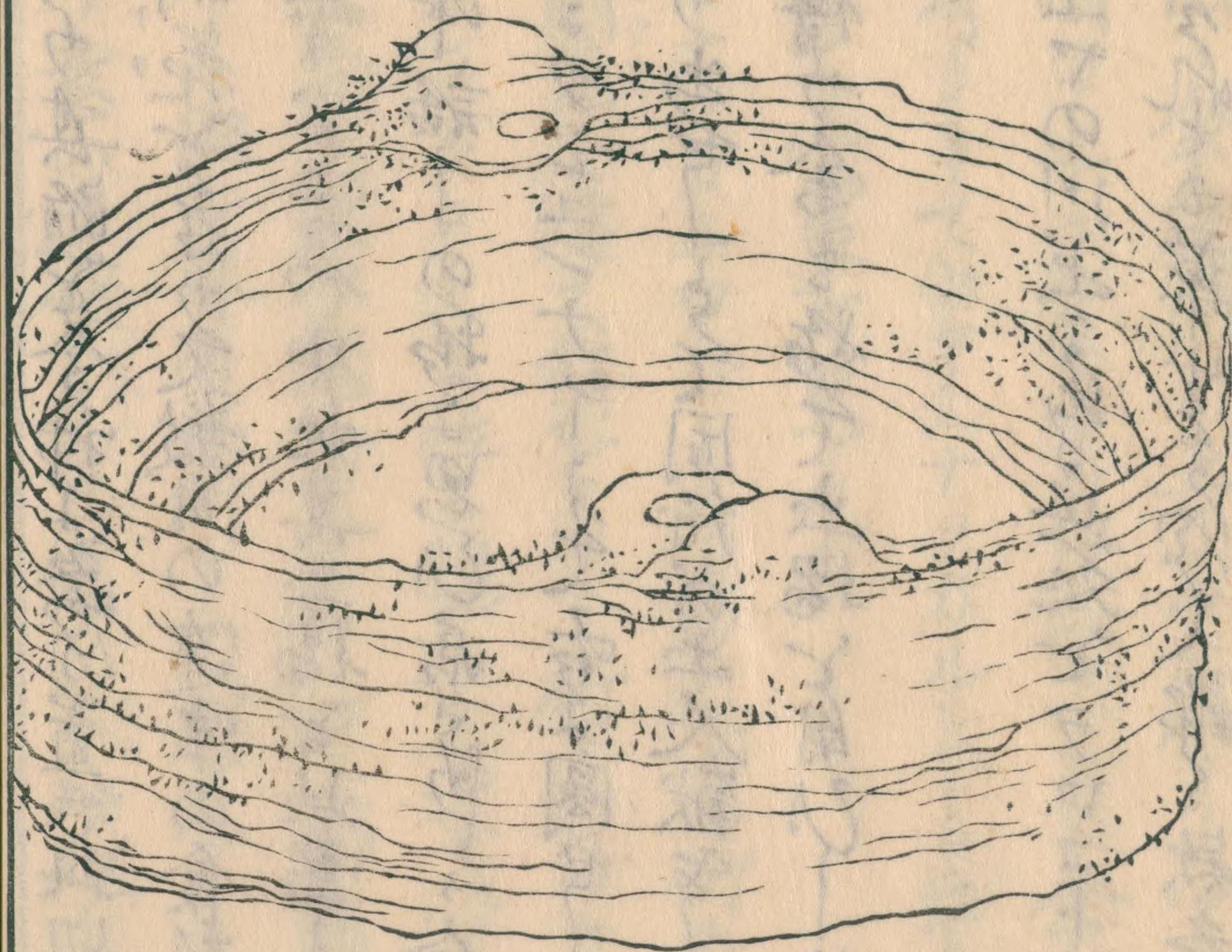
五分モ有坎ナリ

土至テアラタ

砂マヤリナリ

尋氣志郎

縮写



太くもく椀の多きもの言傳は縁より更なり同一括する深藪

中を分て壹里半程初て中くニユニエヤ川の端は出な

注此地ハ字ベンケヲロコトイと云あへし始めはわ川端と

ハンケヲロコトイと云下のワロコトイと云儀あり此辺り歟

冬原あつる余爰は肉蓯蓉と數十莖均くウクニユニエタシ

の小徒ツクニウと云ふ頗物を採へ居る者あるもの故は是を

その何れなるものとも次物とて互連するロレイの出入ア

カラカイ人^名ウ^名は是ハ夷言エバーと云て東海岸の土人ハ

撲傷^{ウチミ}折傷^{クシキ}金創^{キリキス}等よ是を搗碎きて附る其切驗積と

依て考ふる是ハ南濱より西よきく東海岸よき多きと云也

その形像日光山誌まゝ本村園譜等より出され畧す
出入等夫婦此所より小屋を作り居る名をスグロクと云女子を
をトビニと云其傍より小川あり字モツケイと云ト其出入等
何の爲に來り住する也聞よ轉の漢と云一又食料より用ゆるアムラ
コロとの名村の根をほり來り居るとあり依て石連する出
入等より直に煮て振舞う

注アムラニコロと東西蝦夷地との名にして此地是をハ一と
云別黒卷丹のトありは餘ニヨカイと云そのあり是車卷丹
のともありやトマと云て延胡索エニコササの根とも食用と云延胡索
ハ薬爲りして通名をヒツチリと云漢名を滴金卵と云生薬

本村園譜より出され畧す一次にハ一ニヨカイの二種と出直
とのあり

夫より小流と踰る何れも橋本橋あり半里程してやうく深林
の中は夷人の掛る小屋あり此所をエクル地と云此林と出て
廣き所より出り蝦夷松の根深くして草の丈々高くす白き
總揚枝振のめき草多しと云景を直き地あり

注按るゝ是草にあり及菌草キノコの一種あり雑木ヤブ警儀ケイ枝
葉落てる腐クサき喬木倒して朽クチきるの地也と梅雨の次
め此ものを生じて余も此地よりして數十種のものを見ぬ
イナウシ地と云此原野を暫く過て又山道より入り式里余はて



深林の中小高き所へ小石掛し一夜をぬるや今宵は直養と名
ら及いとわひいりしれと

辛苦嘗來雨又風寧堪獨臥亂山中別君最是傷心處今夜

司林唯草蟲

又

斜架危檐了木支潺湲先辨與茶宜泥鞋探嶮穿山骨禿筆

題詩白樹皮雲濕半牀無客伴草埋荒徑有熊窺怪禽夜叫

長松上獨叢幽奇就睡遲

注子ウシとエナヲウシの結語あり此地東西の境目よりて分
水の地あり依て往來の土人東より西よりハ割花を作る



東の方の山靈は嘔吐し西より来る者ハ西の神は嘔吐して逆
中の安と祈るあり依て多く此所は立ち上り故に號るウニを
多しといふ儀あり

廿三日朝曇り五時小屋を出て山林を暫く行ニヨロマトウ地名と
なる沼の端より出て夫より廣き野地なり此地萱草カンソウ以て乱生す間
は蔭翳多く暖交りある地にて四方お開けサレハ鬱氣を散
れしはさきも故の多きもの糠を振蕩のぬし一うらまふ記と云
那ー夫より又落虎杖多く生れりたる中を分け行は前行の
人ハ少くもつてぬきり其落の大き根の所にてハ七ハ寸も
四ハ寸ハ一と云々余より子モイ地名と云る処へ出る此所川あり中流

間斗夫より山道又野地を過てタコエ地名の川上カモイチウといふ所
にて昼飯をまじく深藪の中は箸交りあるを分てケナシ地名
到る又此所も小川あり其傍は夷小屋を軒あれども入るや又
同く処四五丁より中四五間の川は大きな柳の樹の陰をうら
橋をうらむ処あり枝ハ半天のぬきり出て深翠叢と云へむ青
是を越て野地山林をうらむホクイチヤン地名といふ所にて休息あり
禅頼光峯入の畫巻物より彼大江山より童子の岩屋の
まより大なる河を枯木を倒して越るはあり生
物ありと云る其心拍して城ありと云ふと云ふと云ふ
て竊笑しぬ

唐太日記

卷之四

廿九





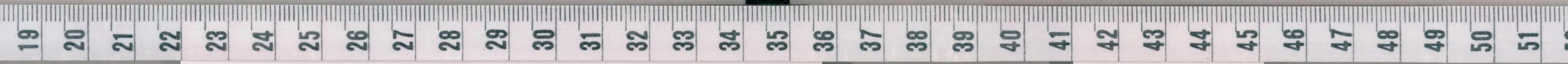
唐土風俗記
丸末付
あやうき
いんま
ま松乃

わんらも
あのみんたやハ
あゝぬ
存免



夫より拾丁余よりフルシチヤン^{地名} 渙小屋式軒あり又拾四五丁
 初てトノシチヤン^{地名} 此辺は妻家土を新ありて七歳斗と四歳斗の
 小兒武人並居をり此妻家ハ我ハ付妻をる人足ホンキツ^{人名} 夫妻
 の家あり妻々ニユコシイケル^{人名} といひ家ハ老人武人ありと云此
 小兒をホンキツ^{人名} ありと云るホンキツ^{人名} 此子と云ふは我ハ
 置クシユンコバン^{地名} 夫婦^名 行て居る^名 此邊の人まは
 常々れらあり今日ハ已う家ハ立寄る^名 以て止宿^名 して
 床^名 此邊^名 此処よりやま^名 同^名 道と約と元三千丁余より
 て嚮導サアブニアイン^{人名} の家ハ暑せりサアブニ^{人名} 當時家内九
 人^名 のようありと云ふ春^名 春^名 斗り^名 あり^名 及^名 寄^名 合^名 世^名 帯^名 のよう

小屋ハ四間ハ二間半あり^名 火^名 煙^名 を^名 二^名 切^名 てあり其一段高き
 所^名 キナ^名 敷^名 あり^名 と云て余^名 坐^名 を^名 設^名 け^名 たり余サアブニ^{人名} 寶物と
 見せよと乞^名 され^名 一本^名 様^名 子^名 あり^名 極^名 上^名 あり^名 筈^名 あり^名 中^名 へ
 赤^名 漆^名 の^名 太^名 刀^名 の^名 身^名 と^名 其^名 鞘^名 と^名 出^名 せ^名 たり^名 然^名 る^名 其^名 刀^名 此^名 結^名 ぶ^名 敷^名
 り^名 靴^名 入^名 り^名 又^名 外^名 へ^名 銀^名 箔^名 と^名 貼^名 け^名 たり^名 昔^名 捕^名 刀^名 の^名 身^名 相^名 の^名 板^名
 あり^名 作^名 り^名 たり^名 見^名 せ^名 たり^名 余^名 ピリ^名 カ^名 くと^名 賞^名 け^名 け^名 ハ^名 サ^名 ア^名 フ^名 ニ^名 其^名
 賞^名 せ^名 たり^名 と^名 何^名 思^名 ひ^名 たり^名 又^名 次^名 あり^名 カ^名 マ^名 ス^名 の^名 内^名 あり^名 女^名 の^名 古^名
 暑^名 と^名 出^名 たり^名 是^名 ハ^名 彼^名 晴^名 れ^名 若^名 の^名 中^名 生^名 壺^名 あり^名 襦^名 袢^名 袢^名
 の^名 後^名 附^名 あり^名 是^名 を^名 折^名 ぎ^名 む^名 といふ^名 あり^名 唯^名 か^名 次^名 の^名 内^名 あり^名 押^名 入^名
 たり^名 是^名 は^名 揉^名 り^名 離^名 れ^名 たり^名 今^名 宵^名 ハ^名 山^名 中^名 と^名 違^名 ひ^名 安^名 心^名 して



うき野ね

注此処平地より東の方のタユイノホリより落る河と南ニヨ
 ロマイの方へ落る河と合して是より五里斗を下りナイ
 ブツ川より落る河より人家九軒ありてサアブニと此所
 の小使役なるもの故に家も相應に大くして余も此處にて
 止宿せしありしに時寤を乞へばはやより一本撈りて
 櫛の如く素より短かきものとせりし中より古著を授り
 大きき刀の身と帯と鞘とを出し是をとりけりしは身廣く
 志く子母榎子巴の役と云ふ程彫きし其鞘ハ出人より
 の細よりくありしや撈りて短くと巻く玉極雅味ありし



表教とてきいとのけり扱其傍の柱とてんるる文字扱のもの
有る教は是と問うる矢口ニシハの太ヒと答へる見ゆる
如何とも手垢して黒くあり終は讀むことをゆらるるも
遺恨ありける

按るる余是事と何処もせよ落書するに及ぶものりて生来
疵附あると徒ら事と恐むの情甚しく依て余は落書つて
し及も及まふは疵附するに及ぶものりて此度の行処も山
中して紙目等とてて夫と目的と一心未だありしもの有
り外ハ我も休こし所ハ必は何成るも志多し置るましとれ
こゝの傍り依ていふ人をして其又生任よ南れハ此用を

を及くしとてんるる如く用ひる凡何成英雄豪傑後よりて
も驚馬におとるる一落書紙目も堂社の柱礎並之の白壁杯
ハと用あるものいふとてゆら備をいから山中うて見ゆる村ら
一照の直もあふとてて是也

廿四日晴よりサーブニの宅を出て前の川を渉りてま
深草の内へ入るる款冬その余のもの果してよりと生茂
て悪きいふんかゝる一トウとトウ地名の眠と通り山より
地とて小川ありやウロウと云所あり爰して鳥雀の鳥
は遊んでるを捕へく深草の内へ教ちやうり夫より村の
中を歩めてミアンチヤ地名と云ふ此所夷家二軒エフンハ人名

唐太日記 卷之四



云々の家より休む此家より直養と休む一里あり此小家の前
は搬英船を備へたり依て是より乗りの川中或は船間余も有
通し是夕コエの川下あり兩岸垂柳して屈曲し拾丁余
りてオン子ナイ地と云川は落合是より幅廣くありあり
注此処余より通り一里あり異り余ら夕コイより山道を
里半計りありへん子カルウシ地と云夕のあまきこき里余も
下り此にアンチヤのエフレハの家より休む夫より廿丁余も
ちくナエブツへ下るあり此ナイフツ川の西北より落来りて
此川の本川をもち是より上より人家或は村もあり一里
是より河の中七八拾間あり及び一里原きこり四里より六里

位より及ぶ當島トツリ以南の第一の巨川にて水豹も
多し

キ、ニウシ地名 アフコタン地名 ビラボ地名
ありと過て三里程してホロスウ
川岸より長く船より此所より女夷を人停居て声と掛りり搬
夷船或は船より余より舟中のサーブ二人と物語りてやぶて
乗来り船と交りて乗替りり此辺より雨頻り降り出し
寒し堪へざる其形状と家ありりりや女夷薪の燧とを持
ち来り火鉢持の物ありれなき人程も有る板より置きりり
手と暖めりり程あり新の板より置きりり板より置きりり
此辺左右の水より水豹討く首と出りり船と宿りりりり



岸の兎の居るといふサーブニは國の是をラリケエ兎の
夷言といふ夫よりまのこき里余してナエブツの岸より青竹俵と
行き妻家より着ると通辞の豊吉と跡船して後までいふ無く
糧米の心の加ふ余柳がさへいふ夫倍をいふ運上屋
チツフアマ、アンナと問ふ妻人等首をいふてイシヤムくと
船いふ爰まで大の望と先ひ如何いせんと案へ燃ひきり雨は
有中ゆく強く寒さん堪へ道は極よ焚火とていふ身を暖め
濡る衣敷と乾く衣とほの間へ船と着て妻倍も通し
直養の書くる書状と取出しと漸く事情もいふたり先
直養の心構は賜りて武苞の米は是等の間宮も持たり

余等の為よしニユンコタンよりおくるべき米は未と着せと先立の
為し跡より賜る米船は昨日此地と過てオタサレ地と云所まで
行過るといふあるを此船と引留て糧食の手当はあはし
とて直養とオタサン地とていふて走り行ふといふありか
故に我等も同行の糧食の如何と先と十方は暮らさ
評先生十方は暮られとてむ目眩は見るといふ
今由米ハ漸くハ稀あり云米も亦幾ありといふれと豊吉も完
とて是より武里斗りも南あると云ユウシナイと云所より云米
を平入加備と取寄といふ是めて皆く力をいふて此夜より云米
を食といふと議して齋したる難耐といふサといふ喫して



打郎より其家の至入の名をワーチヤアイノと云ふ

注此処は東海岸にて萬里の波濤目々清きものあり此河は
壯地第一の大流沢目數十里闊くも源はルウタカノホリより
来り其川の南畔に家居とナイブツを沢の入口とのみ儀
の物而水心塩氣を食て悪し武拾所も上の壯岸一
の沼あり元四り武里もあり其辺り皆根木を系海岸より
五鬚松の長き木より武史位のもの林となりたう秋より末
此辺り鶴居に於て海への水多きなり此を何等の聲り
ききかき家の内よりて對坐し物得しはるも聲と物あり
て聞とり難きしはるものなりや

特1
2457





国立国会図書館 タイトル『唐太日記 2巻』 請求記号 特1-2457

ガラス使用